一宮豪族 平廣常

林 天然

緒言

日本で武家政治を始めたのは、源頼朝である。頼朝は武家の総大将である。その幕下には幾多の武将や参謀がおった。中にも元老株といわるるものが若干ある。元老の中でも、千葉介平常胤と上総介平廣常とが重視されておった。常胤と廣常とは親類の間柄であるが、常胤は重厚沈毅謹厳であったから深く頼朝に信頼され、子孫は永く繁栄した。廣常は祖先の功に誇り、尊大傲慢であったから、頼朝の性格に合わず、加うるに讒者に乗ぜられ、源平の花々しき戦場にも出されず、早くも謀殺されてしまった。しかしながら鎌倉創業の功臣として鎌倉戦史の当初には必ず登場している。この歴史的人物が、わが上総、しかも長生郡一宮の居住者であったとすれば、郷土人としてその経歴の概略を知って置く必要がある。これ筆者が本編を綴っておいたわけである。

① 家系

桓武天皇の曾孫高望王が臣下に降り、宇多天皇の寛平二年五月始めて姓平氏を賜り、上総介に任じ、東国に下り、国務を司り、任満ちたので交代となった。当時京都は藤原氏政権を擅にし、藤原氏にあらざるものは、人にして人にあらざるごとくふる舞い、少しく気慨あるものは、その下風に立つのを潔しとせず、地方に去って、天分を発揮していた。高望京都に帰れば藤原氏の指図を受けねばならず、東国におれば、貴族として地方の尊敬を受け、これに加えて、京都の狭苦しさに反し、関東平野は広々として、誠に居ごこちがよい。いっその事、東国にとどまり、自由に活動してみたいと考え、上総国司の任務が終ると、武州平井に移り、後相模国鎌倉郡村園に移住し、心置きなく一生涯を送った。

高望には子女多く、長男良望は一名国香と言い、常陸大椽に任じ、次男良将鎮守府将軍となり、下総国相馬郡におった。その子将門相馬小次郎と称し、天慶の大乱を起こした。

三男良兼、下総介に任じ、上総国武射郡に居住し、四男良繇上総介に任じ、これまた鎮守府将軍に補せられた。五男良文、村岡五郎と称し、上総、下総、常陸、陸奥等の守介に歴任し、これもまた鎮守府将軍に補せられた。

以上五人の兄弟中、長男良望（一名国香）の嫡男貞盛京都に上り朝廷に仕え、子孫繁昌して後世太政大臣清盛を出したのである。五男良文の子孫が東国で繁栄し、なかんずく千葉、上総、三浦、土肥、秩父（畠山）大庭、梶原、長尾の八氏が、坂東八平氏と称えられ、鎌倉幕府創業の功臣となったのである。

② 千葉氏上下二総に分立す

上総介高望の五男村岡五郎良文は、坂東八平氏の総先祖である。良文の子忠頼、父の職を襲い、上総、下総、常陸、陸奥の守介に歴任し、正四位下に叙せられた。忠頼の子忠常、また上総介に任じ、武蔵押領使を兼ねていたが、叛逆を企て、長元の乱を起こして滅亡した。その子常将時に年十九、敵将源頼信に親愛され、下総権介に任じ、初めて千葉氏を称した。常将の子常長、千葉二世となり、下総権介に任じ、源頼義に属し、安部貞任を討って戦功を立てた。常長の子常兼、上総、下総、両国の司となり、源義家に属し、清原、武衡、同家衡を討伐した千葉三世常兼の長男常重、下総権介に任じ、千葉四世の城主となり、その子常胤、源頼朝に仕え、鎌倉元勲となったのである。

千葉三世の城主常兼の次男常家上総介に任じ、上総国一宮なる柳沢城に移った。ここに於て千葉氏初めて上下二総に分立した。歴史家は一宮の千葉氏を上総介と称し、下総の千葉氏と区別しておった。

上総介廣常は上総一世常家の子孫である。

源頼朝房総三州を徇う（上）

廣常、初め介の八郎と称し、武勇人にすぐれ、父祖につぎ、上総権介に任じ、平治の乱、源義平に属し、いわゆる十七騎

の一人であった。乱後上総一宮に帰り、なお京国の豪族として勢威を張っておった。

廣常は、千葉常胤と同族で、上総と下総を分類し、共に源氏に付属していたが、京都の平家繁栄を極めているので、如何ともすることが出来ず、源氏には義理上離れることは出来ず、さりとて平家に反抗しては一家の死活に関する。何といおうとも、生存するのが人生の一大目的である。廣常はしばらく世の成り行きを傍観しておった。

成功を急ぐものは、失敗しがちである。思慮深き頼朝は二十年の間、伊豆の片田舎で神仏を信仰して時機到来を待っておった。奢るもの久しからず、さすが飛ぶ鳥を落とす平家もだんだん人心を失い、次第に衰頽を来たし、内大臣重盛薨去の後は急に寂莫を感じ、一門は管絃を鳴らして僅かに虚勢を張っていた。一方得意であれば、他方に不平がある。不平の源三位頼政は、不平の以仁王を勧め、平家撲滅の野心を起こし、同時に諸国に蟄伏せる源氏に檄を飛ばした。頼政一戦に打ち負け、宇治の平等院で皺腹掻切って死んだが、それがため、諸国の源氏は白旗をひるがえして蜂起した。

時機は到れり、好機逸すべからずとの警報がしきりに頼朝の鼓膜を打った。左なくとも多年の宿望に燃えていた頼朝、未だ準備とてなかったが、善は急げの俗諺どおり、治承四年八月二十日伊豆相模の同志を相州土肥郷に召集した。北条時政、同義時、土肥実平、岡崎義実、佐々木盛綱、同高綱、大庭景義(景親の兄)、新田忠常、宇佐美政光等、とるものも取りあえず参集し、同月二十三日、同国石橋山に白旗を押し立て、さア来たれとばかり意気天を衝いた。

相模国の住人大庭景親、俣野景久、渋谷重国、武蔵国の住人熊谷直実等平家の党類三千余人馳せ参じた。頼朝の味方は僅か三百余騎、しかも、源氏のあとより、伊藤入道祐親、従卒三百余騎を引具して詰め寄せて来る。勝敗は衆の多寡によって既に定まった。源氏はひとたまりもなく負けて散乱した。頼朝は四十五日の間箱根山に逃げ廻っていた。

これより先三浦介義澄一族は、老父義明を衣笠城に残し、石橋山へ赴かんとし、畠山重忠、河越重朝等にさえぎられ、遂に敗走し、二十七日義澄は甥和田義盛等とともに舟に乗り、安房に赴き、この日北条時政、岡崎義実等も相州土肥より海路房州さして来た。二十八日、頼朝は実平等とともに舟にのり房州へ棹し、翌二十九日猟島(竜島)に上陸した。

九月一日頼朝直に上総介廣常の許に赴くべしと命じた。二日土肥遠平(実平の子)頼朝夫人政子無事なる報告をもたらして来た。三日書を下総国下河辺行平、下野国小山朝政、武蔵国豊島清光、葛西清重等に遣わし、参会すべき由を申入れ、この日上総に赴かんとして長狭郡のある民家に宿泊した時に、同国の住人長狭六郎常伴は平家に加担し、頼朝の宿舎を夜襲せんとした。三浦介義澄如何にしてか、この陰謀を探知し敵兵の来たらざるに先だち長狭六郎を討ってこれを郤けてしまった。

源頼朝房総三州を徇う(下)

頼朝房州より直に上総に入り直接廣常を頼まんとしたが、形勢やや不穏なるをもって、一時上総行を中止し、翌四日秋田義盛を使者として上総に遣わした。当時の上総国府は不明であるが、廣常の居城一宮が国務の中心であったであろう。義盛時に年三十四。一宮城に来たり、頼朝源氏再興の軍を起こしたるより、旧来の好誼により何分の応援を頼むと請うた。廣常前々より源氏に就かんか、平家に味方せんか、迷っていたので、容易に承諾しない。いずれ同族千葉介と相談し、しかる後挨拶せんという。元気旺盛なる義盛、大に憤慨したが如何ともすること出来ず、しからば後日再会せんとて、座を立ち、六日の夜房州に帰着した。頼朝主従案に相違し、一洙の不安を感じた義盛と同時に房州を立ち、下総に赴いた安達藤九郎盛長は同月六日頃千葉に到着した。

常胤年すでに老い、初めは去就に迷ったが、子息等にすすめられ、断乎として源氏を応援と決心し『佐殿国奸を除き、源氏の中絶を再興するに当り殊に使を馳せて、当千葉家を問わる、何等の光栄ぞ。臣老いたりといえども一族を引具し、不日旗下に参加し、全力を竭さん』と、酒盃をあげて盛長をねぎらった。盛長悦んで旅装早々房州に向かい、同月九日頼朝の営に帰着した。

先に上総より帰って来た不首尾の報と相反し、千葉よりの快諾を得た頼朝の一行は雀躍して喜んだ。喜怒哀楽を表情せざる頼朝もわが事成れると、心潜に悦んだであろう。なお四、五日の間上総介廣常よりの回答を待っていたが、その後何の音沙汰もなかった。

九月十三日頼朝は、廣常の参加を待たず上総へ越え西海岸を過ぎ、同月十五日頃、千葉へ到着し、猪鼻台上なる館に案内された。

房州より上総に越ゆる通路に数条がある。しかし東方面は廣常が頑張っているので、中央以西に限る。房州を一巡して上総に入らむには、勝山保田を経、鋸山の麓より上総金谷に出で、湊村より佐貫木更津へ進むのが近道であるが、頼朝は廣常の報を得べく、当時長狭郡金束付近に滞在せじなるべく、九月十三日に至るも上総より何等の挨拶がないので、意を決し、花立峠を越え鹿野山の南方を横ぎり、湊村に出で、それより佐貫、木更津、姉崎、八幡、浜野を経、下総に入り、千葉一族に迎えられたのであろう。当時頼朝従兵僅か三百騎といえば、非常に廣常の動静に注意したるなるべし、房州勝山より千葉までの里程二十里三十町なり。一日十里の行程とすれば、房州国境より千葉まで二日間にして達すべし。されば頼朝一行九

月十三日安房を発し、十五日頃千葉に到着し、一両日間千葉の館に滞在し、十七日下総国府（国府台）に進み、千葉一族その他の将卒も参会したのであろう。

廣常は、頼朝の一行がすでに千葉に向かって進軍したと聞き、常胤早くも頼朝と迎合したものと推断し、急ぎ軍令を国内に発し、周東、周西（周准郡）夷南、夷北（夷隅郡）長南、長北（長生郡）の兵二万騎を引率し、急げ急げとばかり、千葉城を右にみて、市川に進み、九月十九日隈田川なる頼朝の陣営に到着した。頼朝千葉介の献策により、盛んに旗幟を樹て大軍を粧うているものの、今や諸国の土豪を威赫して募兵最中である。廣常遅れたりといえども、二万の大兵を率いて来たのであるから、定めて歓迎してくれるものと予想しておった。ところがあに図らんや、遅参を怒って面会を許さず、後陣にあり、命を待たしめた。廣常深くその態度に心服しこれより志を翻えし、専ら頼朝に忠実たらんと決心したという。

頼朝大軍を率い鎌倉に入る

頼朝武蔵と下総の国境なる隈田川のあたりへ駐屯し、百数十の陣幕を張り、数百千の白旗を並べ、ひらひらと川風に吹き流がさせた。隈田川は平地にあるので、四方より観望することが出来る。そこで数百騎の軍兵は数千にみえ、数千騎の軍卒は数万に眺められる。九月二日常胤及び広常等の舟楫に乗り、全軍武蔵国に入った。同国の土豪葛西清重、豊島清光、足立遠元、江戸重長等、踵を接して来参し、畠山重忠もはじめは平家の味方であって、河越重頼とともに、三浦大介義明を攻殺したのであるが、両人とも前非を悔いて降参し、熊谷直実、平山季重等も来属した。是に於て総軍勢およそ三万余騎と算した。

鎌倉は東、北、西の三方丘陵を繞らし、前には相模灘を控え、風光明媚の景勝地たるのみならず、往時にありては、屈強の要害地であった。坂東八平氏の総先祖上総介高望王も晩年この地に陰棲し、その子孫にして鎮守府将軍たるものは、皆この地に在って東国の重鎮となっていた。また源氏にありても、伊興守頼義をはじめ、その子義家も、頼朝の父左馬頭義朝（義家の孫）も皆この地と浅からぬ関係がある。千葉介常胤は、鎌倉の地勢に精しく、歴代武将との因縁深いのも知っているので、将来頼朝が兵馬の大権を掌握するには、まず覇府を鎌倉に定むべき事を思い、九月六日初めて頼朝の使者安達藤九郎盛長に会見すると、さっそく鎌倉の要害地たることを力説した。頼朝も常胤の建言に相違ないと考え、広漠たる武蔵野に目もくれなかった。

頼朝隈田川付近の陣営に在ること二週間、畠山重忠を先鋒となし、千葉常胤を後陣となし、武歩粛々、長蛇の列をつくり相模に向かって進軍し、九月六日鎌倉に到着した。さっそく大庭景義（景親の兄）を普請奉行となし、居館の工事に着手

し、鶴岡八幡宮を由比ヶ浜より小林郷に遷し、武運の長久を祈った。

頼朝親ら平家の軍を邀う

これより先、治承元年六月藤原成親、同師光、平康頼、僧俊寛等、平家を滅ぼさんとの陰謀を企て、事顕われて遠流された。同年四月源頼政また平家を倒さんとして兵を挙げ、京都やや騒がしくなって来た同年八月二十三日、頼朝兵を石橋山にあげたと聞き、清盛入道をはじめ、一門の驚くこと一方ならず、故内大臣重盛の嫡子三位維盛年なお若しといえども、平氏の嫡統なるを以て、征東の大将軍となり、薩摩守忠度、三河守知盛等これに付き添い、おそるおそる東海道を下り、とりあえず、富士川に陣を張った。上総介藤原忠清、斎藤別当実盛等東国将卒の勇武たぐいなき有様を説いていたので、未だ戦わざる前、平家の将卒はすでに臆病風に吹かれていた。

頼朝捲土重来の勢を以て進み、すでに黄瀬川に到り、甲斐源氏武田氏の一族をして、富士川を越え、平家の後方を衝かしめた。しかる所平家の軍卒は、一夜水禽の羽音に驚き、京都に向かって逃げだしてしまった。源氏方は一矢も損せず、平家の追討軍を走らせ、開いた口は容易に塞がらなかった。

頼朝は勢に乗じ、直に追撃せんとした。千葉介常胤、上総介廣常、三浦介義澄の三将等これをとどめ、常陸国には佐竹太郎義政、同冠者秀義あり、その勢力なかなか侮り難い。東国未だ定まらざるに、西国に赴くは不安なり、よろしく佐竹氏を屈服さすべしと諫言した。そこで頼朝は武田太郎信義、安田三郎義定兄弟をして駿遠二国を護らしめ、九月二十三日鎌倉に帰った。初め石橋山で頼朝を攻めた大庭景親、長尾為宗、同定景等降服して来た。そこで景親を廣常に預け、為宗を岡崎義実に、定景を三浦義澄に預くることとなした。

頼朝常陸に赴き佐竹氏を降す

源義家の弟新羅三郎義光、常陸介となり、長子義業常陸国佐竹郷に土着し、佐竹氏の祖となり、次子義清甲斐に住み武田氏の祖となり三子盛義信州平賀に住み、平賀氏の祖となった。佐竹義兼の子昌義、昌義の子四郎隆義、平氏に仕え常に京都におった。隆義の子冠者秀義、伯父義政と共に常陸におり、威を国内に振っていた。治承四年十月二十七日頼朝自ら将卒を率い、常陸に向かい、十一月四日同国の国府に着いた。同国には佐竹党多いので、簡単に攻撃する訳にゆかない。常胤、広常、義実、実平等、頼朝の重臣共協議を開いた時に廣常は佐竹氏の姻戚たるを以て、まず単身佐竹の城内に入り、平和のうちに参加せしめようとした。伯父義政は直に参上すべしといい、甥秀義は父隆義京都にあるを以て、迂濶に源氏に従うこと

は出来ぬので、金砂城に立籠った。伯父義政（隆義の兄）廣常に誘われ、六天橋まで来ると、廣常不意に義政の首を斬り落としてしまった。

そこで鎌倉の軍勢金砂城を総攻撃してみたが、城郭堅固で容易に陥落せしむることが出来ない。翌五日再び重臣会議を開いた。廣常曰く秀義の叔父蔵人義弘、智謀人にすぐれているが、利欲の念が深い。利を以て誘わば金砂城を陥ること容易に出来ると、衆議一決したので、廣常ひそかに義弘を説き、頼朝義に依って、不義の平家を倒さんとしている。不義にくみし家を滅ぼすは愚の至りである。貴殿よろしく秀義を亡しその遺領を給わるべしと、義弘果たしてこれを承諾し、廣常を案内し、城の後ろにまわり、鬨の声をあげて城に迫った。秀義不意を討たれ、なす所を知らず、いずくへか逃げ去ってしまった。廣常城に火を放ち、城郭を焼払い、兵を四方に出し、秀義をさがしめたが遂に見当たらない。同月八日佐竹の領地、常陸及び陸奥の七郎を没収し、戦功者に分与し、翌九日鎌倉に帰った。

鎌倉軍に遂われていた秀義は源氏の一族であるので後秀義の罪赦され、常陸に帰った。文治元年七月頼朝藤原泰衡を奥州に攻むるの時秀義国兵を率い、宇都宮に鎌倉に会合した。

頼朝広常の館に滞在す

治承四年九月六日頼朝鎌倉に入り、さっそく大倉の郷に第一を卜し、居館を新築するに決定した。同年十月大庭景義工事奉行として、新築に取りかかった。如何に質素を旨とすればとて天下に号令すべき役宅である故、武将の庭宅とは異なり廣大ならざるを得ない。従って落成するまでには、相当の日時を要する。頼朝は其間重臣どもの家に起臥していたとみられる。上総介廣常の家もその一つであった。

広常の屋敷は、鎌倉の朝比奈切通し坂近くにあり、頼朝の館は大倉にあった。同年十二月新館へ移転するの儀式が行なわれた。頼朝水干を着け、栗毛の馬に乗って出られた。和田義盛先達となり、加々美次郎長清、頼朝の右側に、毛品冠者秀光その左側に付き添い、北条時政、同四郎、足利義兼、山名義範、千葉常胤、同太郎胤止、同六郎太夫胤頼、藤九郎盛長、土肥実平、岡崎義実、土屋宗遠、佐々木定綱、同盛綱以下供奉し、畠山重忠最末に列し、出仕者すべて三百十一人であった。鎌倉は、もと海浜の辺土で漁夫野人の住める村落に過ぎなかったが、頼朝本拠の地となったので、数万の将卒鎌倉及び其付近に居住し、たちまち一大都会を現出せしめた。

廣常の驕恣頼朝に嫌わる

治承五年六月十九日、頼朝納涼と遊散のため、三浦に赴き義澄の宅に招待された。其日上総介廣常も通知により、佐賀岡の浜に参会した。頼朝が見えたので郎党五十余人、悉く馬より下り砂上に平伏した。廣常のみは乗馬のまま豪然として轡をゆるめ、少しく体を屈して敬礼した。時に義澄の弟佐原十郎義連見るに忍びず廣常の側に行き、早く下馬して、頼朝の前へ行き伺候せよと注意した。廣常肯せず、我家三代の間、公私とも未だ其の礼をなさずと、其儘頼朝の後に随った。頼朝は先ず義澄の父三浦大介義明戦死の遺跡を訪うて懇に亡者を弔うた。

此日三浦義澄力の限り、全美を尽くして頼朝一行を饗応した酒宴も漸く酣となり主従沈酔して座興を催した。義澄の叔父岡崎四郎義実、頼朝の水干を所望した。頼朝快よくこれを諾い、義実をして即座にこれを着用せしめた。義実大に悦び拝謝した。ところが廣常之を嫉み斯の如き美服は廣常の如き功臣の拝領すべきものである。義実の如き老耄が賞與に預かるとは、其意がわからないと暴言を吐いた。義実も酔っているので、黙っていられず、廣常貴殿の功と拙者の功といずれが多いのであるか、余り勝手なことをいうなと、互に罵り合った。頼朝は泥酔者どもの事であるから一言も発しなかった。

義澄の弟佐原十郎義連堪り兼ね走り来って、叔父義実を叱し、頼朝公の入御により、兄義澄昼夜心を砕き歓待に尽くしている。この心も知らず、乱暴な言葉を発するとは何事である。これこそ耄碌したではないか。

また廣常殿も時と場所とを弁えず、暴言を吐くとは何事ぞ、所存あらば後日篤と申述べられたし、今日御前に於て遊宴を妨ぐとは、甚だ不都合であると詰った。義連の言うところ、一々道理に叶うので両人とも沈黙し、何事も無かった。

そうして頼朝は翌々日二十一日鎌倉に帰った。

以上の事あって以来、頼朝やや廣常を疎んずるようになった。廣常も薄々これを覚った。如何にもして頼朝の歓心を買わんと思っていた。

大納言平時忠の子息伯耆守時家、継母の讒により、上総に流されていた。国司たる廣常これに保護を加え、女を妻わせて置いた。頼朝京都の人を愛すと聞き、壽永元年一月二十三日、時家をして頼朝の館へ伺候せしめ、頼朝と廣常との間を取り持たしめた。果して其効果あったか否や、頼朝は元のとおり廣常を重臣として取扱っていたが、如何せん頼朝には梶原景時という陰険者が付添うているので前途はあやしいものである。

廣常頼家誕生の儀式を勤む

壽永元年八月頼朝（年三十六）の夫人政子（年二十六）妊娠して既に臨月となった。同月十一日分娩近づいたので祈願の

ため箱根権現をはじめ、相模、武蔵、常陸、下総、上総、安房の諸社へ使者を派遣した。即ち千葉小太夫胤正(常胤長男)を下総香取神社へ、廣常の子息小権介良常を上総一宮玉前神社へ、三浦平六義村（義澄の子）を安房国東條寺へ、安西三郎景益を同国洲崎神社へ遣わし、各祈禱をこらしめた。翌八月十二日酉刻、男子頼家安産あり、師岡兵衛重経大庭平太景義、多々良権守貞義鳴弦の役をつとめ上総介廣常引目の役を勤めた。

十四日三夜の儀は、小山四郎朝政沙汰せられ、十六日五夜の儀は上総介廣常沙汰せられ、十八日七夜の儀は千葉介常胤沙汰せられ、二十九日夜の儀は外祖父北條時政沙汰せられた。

右の如く廣常は、常胤と共に諸々の儀式に列するの光栄を得たのである。

廣常梶原景時に謀殺せらる

廣常は祖先以来世々上総の国司となりしを以て、自然尊大の気質を養成せられ、のみならず天性傲慢の悪癖もあったのである。

頼朝は、沈毅で喜怒色に顕われないという人物である故、廣常の如き傲慢不遜の輩には何らしても親しみがない。しかも頼朝の寵臣に梶原平三景時という意地わるが居った。梶原は千葉、三浦、畠山、大庭の諸氏と同じく、坂東八平氏の仲間であるが、性来の狡猾はとかく他の諸将と合わない景時の説により惨害を受けしものは、義経をはじめ、武田光朝数人の多きに達していたが頼朝の存命中は如何ともすることが出来ない。正治元年正月頼朝薨去し、其子頼家二代将軍となるや、諸将連署して景時の不義不正を訴え、翌二年正月諸将又相談して景時一族を誅伐してしまった。廣常は鎌倉功臣中、第一先に彼の毒舌にかかり、頼朝をして廣常排除を決せしめた。即ち壽永二年十二月二十二日廣常を営中に招き、何気なく雙六をたたかわせ、油断をみて景時一刀を抜き、廣常の頸を打ち落としてしまった。けれども重臣ども世を憚かり、鎌倉日記ともいうべき吾妻鏡（東鑑）にその記事を載せてない。

鎌倉の朝比奈功通坂の辺りに廣常の邸宅址がある。また其近くに梶原が太刀洗と名づくる清水の涌出地がある。これ景時が広常の首を斬った時、この所にて太刀の血を洗った遺跡ありという。

頼朝前非を悔い、同年十二月三十日上総国御家人周西次郎助忠(廣常の従兄弟)以下に、本宅に安堵すべき旨達せられた。翌年即ち壽永三年正月元旦例により鶴岡八幡宮で御神楽があった。けれども廣常が命に斃れ、未だ穢気がかかっているので、信仰家の頼朝は遠慮して参拝せず、判官代邦通を奉幣使として遣わしめた。

『付記』 平廣常と同じく驕傲の為、頼朝にきらわれ、中途で謀殺された名将がある。甲斐源氏の棟梁武田信義の嗣子、一條次郎忠頼は源氏に属し、木曾義仲や平家を討って戦功をたてていたが傲慢であるので頼朝にきらわれていた。頼朝忠頼に書を送り、貴殿の戦功を祝わんため、鎌倉に来たれと招いた。忠頼まさか謀殺されるとは思わぬので、営中に来たり不意に天野遠景の為一刀の下に討殺されてしまった。従士三人大に怒り、営中に躍り入り、手当たり次第に斬りまわり死傷者五十四人を出し、三人共殉死を遂げた。時は元暦元年六月十六日、廣常の死をさること僅か七ヵ月後である。

頼朝前非を悔い廣常の一族を赦免す

壽永三年正月上総国一宮の神宮等鎌倉府廳へ訴えて曰う。故上総介廣常在世の時、宿願あって、鎧一領を玉前神社の宝殿に納め奉ると、頼朝功臣廣常を殺し、少なからず気がとがめている際とて、之を聞かれ、定めて仔細あらん、其鎧持参せよと命じた。同月八日藤ノ判官代邦通及一品房等を上総へ遣わし、更に甲二領を寄進し、彼の奉納の鎧と取替えさせた。

同月十七日、判盲代邦通、一品房等、一宮神宮兼重と共に廣常奉納の鎧を携え鎌倉へ帰参した。即ち殿中に於て彼の鎧を見ると、小桜皮威で、一封の書状を高結に付けられてあった。頼朝手ずから開きみると、

上総国一宮宝前

立甲所願事

一、三箇年ノ中可レ寄二進神田二十町一事

一、三箇年ノ中可レ致二如レ式造営一事

一、三箇年ノ中可レ射二二万度流鏑馬一事

右志者為二前兵衛佐殿下ノ心中、祈願成就、東国泰平一也如レ此願望令二一々円満一者弥可レ奉レ崇レ神ノ威光一者也

仍立願如レ右

治承四年七月　日

上総権介手朝臣廣常

と記してあった。頼朝此願書により、廣常の異心なきことが永解された。けれども今となりてはいたし方がない。ただ追福を営むのほかはない。そこで廣常の縁座により幽囚されていた天羽庄司直胤、相馬九郎常清等の罪を赦し、各本土に安堵せしめた。

同年二月十四日上総国御家人等に対し、私領本宅に於て元の如く領掌せしむべき旨、頼朝よりの下文を給った。同年三月十三日廣常の甥尾張の住人原大夫高春を召出し、廣常の罪なきを以て、元の如く知行所を領知すべき由、言い渡された。頼朝が如何に後悔していたかが察しられる。

廣常一族の関係

廣常は、上総介常隆の長男で家督をつぎ、初め上総権介として国政を執っていた。叔父即ち常隆の弟に、伊西新介常景、伊東三郎常茂、廳南四郎常成、大椎五郎維常がある。治承四年十月三日頼朝の命を受け、千葉胤正等に攻殺された伊北庄司常仲は、伊西常景の子で、廣常とは従兄弟の間柄である。

金田頼次は、廣常の弟で上総長柄郡金田郷（今長生郡長生村金田区）を領し、金田小太夫と称し、三浦大介義明の女婿となり、治承四年八月二十三日、頼朝が石橋山に義兵を挙ぐると、平家の属将畠山重忠、河越重頼等三浦の衣笠城に進撃して来た。頼次兵七千騎（七十騎？）を率い、衣笠城に馳せ参じ、和田義盛（義明の孫）と共に西の木戸を守っていたが、衆寡敵せず、同月二十七日衣笠城陥落するの後、上総に帰り、壽永二年十二月兄廣常謀殺さるるの後病歿したとあるが、同時に攻殺されたかあるいは自殺されたかも知れぬ。翌三年二月嫡子康常赦免されたので、これまた金田小太夫と称し、同郡勝見城（今長生郡土睦村寺崎）におり、頼朝に仕えておった。その子成常の時上総介千葉秀胤（当時土睦村大谷木居住）北條氏に滅ぼされ、成常同族たるの関係上、勝見城を退き本家たる下総千葉介方に走り、その子胤泰叔父千葉胤定の養子となり鏑木孫八郎と称し、数世の後金田氏に復し、勝見城に拠り、更に数世の後、参河に移り、徳川家に仕え、以て王政維新に至った。今一宮町老女子に閑居せる金田鬼一氏は、その後裔にして久しく学習院教授であった。独逸留学を命ぜられ独逸文学者として学界に知られてる。

○ 天羽直胤は、庄司と称し、廣常の弟で天羽郡（今君津郡の内）を領していた。

○ 相馬常清は、九郎と称し、廣常の弟で角田氏の先祖である。

○ 平良常は廣常の嫡子で、小権介と称し、父廣常に次ぎ一宮五代の城主たるべきであったが、壽永二年十二月二十二日父廣常謀殺されたので、同日自殺してしまった。

○ 廣常の妹、尾張の住人原に嫁していた。其子高春、原太夫と称し、治承四年八月頼朝の味方となった。壽永二年十二月廣常誅死の後、辺土に蟄伏していたが、同三年三月赦され、元の如く知行所を領掌せしめられた。

○ 廣常の長女、治承五年二月一日頼朝の媒妁で、甲斐の豪族加々美次郎長清の夫人となった。長清は武田遠光の子で、小笠原左京太夫と称し、頼朝に仕え、仁治三年八十一才で卒した。

○ 廣常の次女、伯耆守平時家の夫人となった。時家は大納言平時忠の子で、継母の讒により上総国に配流されたので、廣常之を保護し、女婿となしたのである。

廣常と常胤

廣常も常胤も、千葉第三世常兼より分流した子孫で、再従兄弟に近い間柄である。常胤の方は代々下総介に任じ、千葉城に於て国政を司り、廣常の方は世々上総介に任じ、一宮一柳沢城に於て国務を取っていたのであろう。ともに坂東八平氏の中で、いずれ劣らぬ豪族であった。

年齢はといえば、常胤は元永元年五月生まれ、保元の乱の時は三十九才であった。頼朝石橋山に兵を挙げた治承四年は六十三才の老齢で子息胤正は世盛りの四十才であった。廣常の年齢は記録がないので想像するの外はない。平治の乱の時、悪源太義平（頼朝の兄）十七騎の一人として戦ったといえば、二十才以上であったと思う。仮に二十才とすれば、平治の乱には二十三才で、治承四年には四十四才となる。梶原景時の為謀殺された壽永二年十二月は四十七才になる推定である。

治承五年二月長女が甲斐源氏の名族加々美次郎長清（小笠原氏の祖）に嫁したといえば其時四十八才から五十才までであろう。果たして推定どおりとすれば、常胤の方が遙は兄株である。

性格からいえば、常胤の方は大日本史に厚重謹倹とあり、鎌倉史に重厚沈毅長兵略とあり、いずれにするも、温厚の中に一種の威厳を具え、篤実にして質素を旨とし、礼儀正しかったのであろう。廣常の方は、鎌倉史には資性豪邁としてある。豪邁はやがて傲慢不遜となり、幕府創業の元勲でありながら、遂に奸臣梶原等の乗ずるところとなり、未だ十分の手腕を振るうの時機を待たず暗から暗へ葬られてしまった。実際廣常が頼朝の摩下にあって活動したのは、治承四年九月から壽永二年十二月までの三年四ヶ月間である。廣常死するの翌年、元歴元年二月には一ノ谷の戦あり、同二年二月には八島や壇ノ浦の決戦あり、廣常にして存世ならば、必ずや一方の大将として花々しき戦功を立てたのであろう。憐むべき味方同士に惨殺され、千歳浮かぶことが出来ないのであろう。

廣常の遺領

壽永二年十二月上総介廣常鎌倉の営中で誅殺され、一族謹慎中、廣常の遺領東上総から西南地方は、宗家千葉常胤と和田

義盛(好んで大多喜地方在住)に分配された。常胤既に老齢たるにより、これを孫の常秀(通称境平次)に譲渡した。常秀当国一宮の西隣大柳(後土睦村大谷木)に居館を構え、大柳館と称し、上総介(自仕か)となった。建保元年五月和田義盛北條氏を滅ぼさんと欲し、兵を鎌倉にあげ敗滅し、其遺領上総にあるもの、悉く大柳一世常秀に授けられた。大柳二世秀胤、三浦義村の女を娶り、鎌倉評定衆となり、勢力あった。ところが義村の子泰村又々北條氏を憎み之を亡ぼさんと考え、宝治元年五月兵を起こし、またも敗戦してしまった。秀胤は泰村の妹聟であるので、時を移さず、鎌倉勢打ち寄せ来り、一戦に打ち負け、秀胤一族は館に火をかけ自殺してしまった。秀胤の遺領は、足利三世義氏(入道正義)に与えられてしまったのである。

足利氏と上総

八幡太郎義家の子義国には二人の男子あり、長男義重は、新田氏の祖となり、次男義康は足利氏の祖となり、頼朝の従母妹を娶った。其子義兼足利二世となり、北條時政の女を娶り、頼朝と義兄弟となった。

文治元年三月には、平家西海で滅亡し義兼上総介に任じ、同五年上総介を辞し、故郷下野国足利に隠退した。

三世義氏北條泰時の女を娶り和田合戦や承久の乱に戦功を立て、宝治元年六月三浦泰時叛逆を企て、大柳二世の館主秀胤之にくみし、滅亡するや其遺領を受領したという事になっている。千葉分家たる常秀、秀胤の二世上総介となり、足利義兼二世も又上総介となったとすれば、其就任年代が合わない。我邦では中世以来揚名の守介あり、実際政務を執らざるもただ名称のみ、某国の守、某国の介と名乗ったものがある。上総七兵衛景清の父藤原忠清の如き、上総守と通称していた。

廣常居城に就て

我邦では孝徳天皇の大化元年従来の諸制度を改め、諸国に国司を置き、中央政府より長官を派遣し、四年を以て任期としておった。天長三年九月上総、上野、常陸の三国を以て親王の任国と定めた。それ故上総外二国には、国守といわず大守と称し、実際は親王は名のみで上総介或は権介が実務を執っていた。大化の新政以来三百年ばかりの間は、とにかく中央政府の命令通り諸政が行なわれていたが、藤原氏が人心を失うに随い、朝命を奉ぜざるもの漸々減少し、地方の土豪が勢力を得、国守はただ虚位を有するに過ぎなく、下総や上総には、土豪の千葉氏が代々介あるいは権介と称し、世襲の職権を握っておった。

大化新政以来は、下総の国府は、市川市国府台、上総の国府は市原郡総社村能満に定めて置いたが、後世にいたり、下総の土豪千葉氏が、千葉城で、上総の土豪千葉氏が一宮城に居を構え国務を執っていた。当時一宮城は柳澤城と呼び一宮市街の西、高藤山に構えていたと認定されている。

廣常の居城については、猶一説がある。夷隅郡下布施村の西南隅に字殿台と称する高台あり、面積八九反歩南方を奥殿台、北方を前殿台と及び夷隅川の一支流を繞らし、懸崖絶壁の要害地である。呈伝によれば、上総介廣常の居城址で今猶物見台、要害台、根古屋、鍛治屋敷、堀内等の地名あり、和田義盛が治承四年九月四日頼朝の命を受け、廣常の館に来たり、命を伝え翌々日、即ち九月六日房州東條に帰ったとすれば、往復の日間は布施の地点が適合している。北外夷隅郡内には廣常に関する伝説が非常に多く布施村を以て根拠地と看做している。江戸時代の末期同郡宿戸村(後総野村)の儒者磯野闌畦なる人、其師太田錦城に頼み廣常の墓誌銘を作り、文化十三年九月同村八幡祠の境内に一大碑を建てて置いたという。

長生郡内に於ける廣常関係地

(一) 治承四年七月廣常は頼朝の武運長久を一宮玉前神社に祈願し、鎧一領を同神社に奉納した。(東鑑)

(二) 壽永元年八月頼朝夫人政子妊娠して臨月になったので廣常の子良常を上総に遣わし、玉前神社に祈願せしめた。(同上)

(三) 千葉諸系図中、最も重要視されている千葉大系図に、上総千葉氏第一世常家の経歴中、長柄郡一宮柳澤城にいると明記し、二世常明、三世常隆、四世廣常、いずれも上総権介とする。

(四) 廣常の弟頼次、長柄郡金田郷を領し、金田小太夫と称す。(大系図)

(五) 頼次の嫡子康常、勝見城(土睦村寺崎区)に居住す。(同上)

(六) 長柄郡大谷木村(元大柳村)西月山安養寺は、廣常の菩提所である。(寺伝郷土誌)

(七) 往時は住所を以て姓氏とする例がある。廣常の叔父に廳南四郎常成、其子に廳南太郎常家がある。(大系図)

(八) 廣常の同族千葉常秀(常胤の孫)上総介廣常の遺領を受け、一宮大柳城(土睦村大谷木)にいる。(同上)

(九) 千葉常秀の次男時常、埴生荘を領し、埴生次郎と称し兄秀胤を援け、大柳城で戦死した。(同上)

埴生郡は一宮川の南部で明治三十年四月長柄郡と合併し、長生郡となったのである。

(十) 常秀の弟胤廣大柳村の隣村三ヶ谷村に居住せしなるべし。三谷四郎と称し、子孫皆三谷氏を名乗っている。(同上)

(十一) 文久二年正月一宮藩主加納久徴建設、古賀茶絡撰の高藤山古蹟之碑文に廣常の居城として形勢を詳に記している。

筆者は大正元年長生郡教育会より嘱託を受け、長生郡郷土誌を編集するまでは、伝説に迷わされ、夷隅郡を以て、廣常の本拠地と思い込んでおったが、其後種々研究の結果、本郡一宮を以て、広常の勢力中心地たることを証明するに至ったのである故、玆に附記することとした。

上総氏について

佐久間珖甫

はしがき

平安朝のころの関東にあって、その勢力を大いに伸張した武士団に桓武平氏の一統がある。関東八平氏と称される上総・長尾・千葉・三浦・土肥・大庭・梶原・畠山の諸氏が、すなわちこれである。桓武天皇の子葛原親王が天長二年（八二五）の上表によって、孫の高望王に平姓を賜ったのは、寛平二年(八九〇)五月である。つづいて高望は上総介に任ぜられたが、これが桓武平氏と上総国との結びつきの始めである。高望の子、良文以来世襲して上総介を称したが、その子孫は、機会あるごとに土地を開墾して開発領主となり、あるいは在地の古代豪族所有荘園の荘司となって、それらの土地豪族と密接な関係をもつようになっていったのである。のちに七世常兼にいたり、遺命をもって常家、常重の二子に両総の所領を分かち与えた。すなわち、常家は上総介として上総の所領を受け一宮柳沢城に住み、常重は千葉介として千葉の亥鼻城に移り、ここに初めて、上総、千葉の両氏がうまれたのである。

上総国は関東の大国であって、平安朝の始め天長三年(八二六)九月、常陸・上野とともに国司を大守と呼ぶこととなり、親王の任国に定められた。もっとも親王任国に制定されたものの、大守の親王は現地には赴任せず、いわゆる遙任であって、

上総介が任されて一切の事を処理した。したがって、上総介の権威は、国司に代わるものであった。高望が上総介となってより広常に至るまで、これを称したものは十代を数え、良文の嫡流は殆ど上総介を称している。僅かに六世の常長（常永）だけが上総介を称しなかったことが、諸系図によって知られる。しかし、上総権介広常の滅亡ののち、その遺領は、頼朝の信任最も厚かった千葉介常胤と待所別当であった和田義盛に分かち与えられたのである。常胤は孫にあたる堺平次常秀にこれを譲り、広常の居館の地におらしめた。これにより上総氏は、千葉氏に従属するかたちとなり、常家以来上総に覇をとなえた権威は次第に失われ、やがて千葉氏支流かの如く考えられるようになった。従って、千葉氏に関する資料は多く見られるが、上総氏についての文献はこれというものがないのである。上総氏の事績を知ろうとすれば、いきおい千葉氏関係の諸系図などに拠らなければならない。そのため、上総氏の構成、分布等の究明は、まことに困難をきわめる。これは房総郷土研究上にとっても遺憾であるから、以下すこしく上総氏の世系をたづねてみることとする。

桓武平氏の概要

桓武天皇の曾孫、高望は平朝臣の賜姓と同時に従五位下に敍せられ、上総介に任ぜられたが、彼はこの時初めて京都より関東に下向したのではない。祖父葛原親王は既に関東に下向していたものの如く、鎌倉郡村岡には葛原親王の旧居跡と伝えられるところがある。また嘉祥二年（八四九）の官符に、下総葛原牧が見え、香取郡八都村神生の大宮台に親王祠がある。この葛原牧は恐らく葛原親王の荘園であろうといわれている。また高望の孫平将門は、高望の上総介任官の前年、寛平元年（八八九）に出生している。これらのことから考えると高望の賜姓以前、既に関東に土着していたものと推測することができる。高望の居住したと伝えるところは、

武蔵国平井　南葛飾郡平井

相模国村岡　鎌倉市村岡

であるが、上総国における居地については何ら伝えられていない。奥山松濤氏の研究によれば、上総市原郡八幡宿の無量寺は、高望の上総介赴任以来、その父、高見王の菩提のために創立したものとの伝えがあるという。上総介の地位は、国司や大守と同様の権威をもっていたのであろうから、恐らく上総国府（市原郡能満附近）の近くに居館していたものと考えられぬこともない。高望には何人かの子があり、良望（国香常陸大掾）、良兼（下総介長田祖）、良文（上総介、下総介、常陸介）、良将（鎮守府将軍）などが有名である。

高望の五子良文は、仁和二年(八八六)三月の生まれというから、父高望の賜姓の寛平二年は良文四才のこととなる。良文は始め武蔵国村岡に居て村岡与五郎と称し、武幹一門中にすぐれ、多くの郎従、家人を養い、弓馬の道に励み武勇を以って、その名を関東にとどろかした。そして未墾地を開拓して所領とし、開発領主となっていって、その地を多くの子孫につたえたのである。良文の居地として伝えられるところは、武蔵国平井・下総国佐倉・同国香取郡樹林寺・上総国下野郷・武蔵国村岡・相模国村岡等である。承平五年(九三五)平将門は、父良将の遺領相続をめぐって、伯父の常陸大椽国香(高望の嫡子、良望と号し、常陸土浦に居る)と隙を生じ相戦う。良文は国香に党し、上野国府中の染谷川に将門を討って功があったという。しかし『将門記』はこれをいわず、良文は天慶二年(九三九)鎮守府将軍陸奥守に任ぜられ、陸奥国に赴任しており、将門の奇禍に罹れるを救い得なかったであろうとしている。これによると、良文は将門の内訌問題には、関与しなかったことがわかる。また『千葉伝考記』や『千葉大系図』によると、良文に将門の旧領を賜わったことが見える。しかし良文は、既に広大な下総相馬郡、立花郡を開発したことは事実と思われる。また良文は上総介の外に下総介、常陸介も兼ね、その子孫は、それぞれの地に繁栄し、関東八平氏の基となった。良文には忠頼、忠通の二子が有名である。忠頼は父の職を継いで上総介となり、次子忠通は村岡小五郎と称し、相模国村岡におり、附近の郡郷を領し、三浦・長尾・大庭等の祖となっている。

良文の嫡子忠頼は、始め村岡二郎と称し相模国村岡におり、武蔵権守となって武蔵国村岡に移った。そして父、良文の後を継いで上総介となり、下総介・常陸介・陸奥守を兼ね、その妻は平将門の女であるという。忠頼は、はじめ恒明と称し、相馬御厨の下司となり、その子孫は相馬氏を称した。忠頼には忠常、将常、頼尊の三子がある。

忠頼の嫡子忠常(忠経)は、始め相模の村岡におり、後に武蔵の村岡にもいたが、父の職を承けて、上総介に任ぜられ、武蔵国押領使を兼ね、父祖以来の武蔵、両総の各地に多くの所領をもち、おおいに勢威を振るった。「千葉系図」等の註記によって忠常の推定居所をあげると、

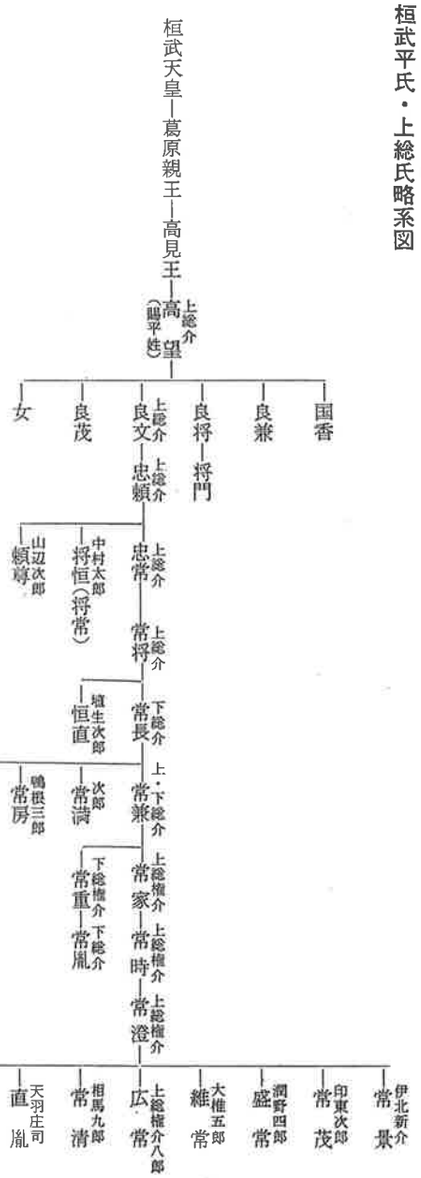
上総国上野郷　長生郡長柄村大字上野区または、市原郡市東村大字奈良
上総国大　椎　山武郡土気本郷町大字大椎
下総国大　友　香取郡神代村大字大友字政所台

である。忠常が上総介であったことは『日本紀略』・『扶桑略記』・『百練鈔』等によって知られるが、『今昔物語』に、

「下総国ニ平忠恒ト云フ兵有リケリ、私ノ勢力極テ大キニシテ、上総下総ヲ皆我ママニ進退シテ、公事ヲモ不レ為リケリ」

とあるくらい、その勢力は天下に鳴りひびいていたようである。忠常のおこした長元の乱については、別項本編に詳しいので略すこととする。

桓武平氏・上総氏略系図



忠頼の次子、将常は中村太郎と称し、武蔵権守に任ぜられ、武蔵国秩父郡中村郷(後の大宮郷、現秩父市)にいた。治安三年(一〇二三)の春、武蔵介藤原直枝が勅宣に背いたので、征討使将常は相模、上総等の軍兵を率いて、武蔵豊島郡にこれを攻めて平定した。五月上洛して復命し、その恩賞として上総国埴生郡・下総国葛西郡・武蔵国豊島郡・駿河国益頭郡(現在静岡市附近)の地を得て、子孫は上総はじめ各地に繁衍したのである。将常の弟頼尊は、山辺次郎、あるいは山辺僧都といい、上総山辺郡、現在の山武郡下に居館したもののようである。

上総介忠常の嫡子常将は、小次郎と称し、上総大椎に居をかまえた。常将は父忠常反乱の関係から罪されるところを、源頼信の尽力によってゆるされた。そして遺領を継承し、上総介となったのである。爾来、将常の子孫は心を源家に寄せ、長くその関係はつづいた。永承六年(一〇五一)陸奥の安倍氏が反乱をおこし、朝廷は源頼義、義家に命じこれを平定せし

めたが、このとき常将は一族とともにこれにしたがい功があった。一説によれば、常将は始め父の居所下総の大友に居たが、のち千葉に移ったともいわれている。常将の嫡子を常長、次子を恒直という。恒直は埴生次郎を称したが、上総埴生郡にはかって将常の恩賞地があったからその地に居住したものと考えられる。

常将の嫡子、常長は四郎大夫、または千葉太郎ともいい、下総権介で武蔵押領使を兼ね、千葉に居住したと伝えられるが、千葉諸系図によると上総介には任ぜられなかったようである。

嫡子を常兼、次を次郎常満といった。三男常房は鴨根三郎、または千田氏を称し、夷隅郡鴨根郷（夷隅郡中根村）及び上総埴生郡千田村（長生郡長南町）を領した。常房の子に、常能、常途、常基がある。常能は金原庄司（香取郡飯高村金原）、常途は原四郎、常基は粟飯原孫平とそれぞれ呼ばれた。

下総千田も恐らく常房の開拓したもので、後に千葉氏の所領となり、千田を「治田」と呼ぶようになったのではないかと思われる。

また、常長の五子を常時、あるいは常晴という。相馬五郎と称し、下総相馬の伝領を支配したが、やがて上総氏を継いで上総権介になった。

常兼は常長の嫡子で、曾祖父以来の居館のある地、上総国大椎にいたため大椎権介ともいわれた。出羽の俘囚征討に義家にしたがって、父とともに功あったおかげで従五位上に叙せられ、上総、下総両介に任ぜられている。その死にのぞんで、上総、下総の所領を二子に分与し、代々これを支配せしむることを遺言した。すなわち常家を上総権介に、常重を下総権介としたのである。常家は上総一宮柳沢城に、常重は下総千葉亥鼻城に、おのおの移り住んで伝領を支配することとなった。

上総氏の創成

上述のとおり上総氏は、高望以来、累世、上総介あるいは上総権介に任ぜられ、下総介・常陸介や武蔵国押領使を兼任していたものもあった。ところが常兼の代になって、その遺言により、上総、下総両国の伝領支配を分立することとなり、ここにはじめて上総氏と千葉氏の二家に分かれることとなったのである。

上総権介となった常家については、その伝が詳かでない。しかも『尊卑分脈』は如何なる理由によるか、これを全く載せていない。しかし千葉諸系図は神代本を除くほとんどのものが常家を載せている。ことに『別本千葉系図』（群書類従本）は「常家、上総坂太郎・上総介元祖」とし、『千葉上総系図』にも「上総坂太郎」とある。『千葉伝考記』（千葉氏の氏寺金剛授

寺（今はない）古記録）には「二男常家をして上総国長柄郡一ノ宮大柳城に居らしめ上総介に任ず」とある。『千葉大系図』は「常家次男」としているが、坂太郎の輩号からみても、また当時権威のあった上総介の地位から考察しても当然嫡子とみるべきではなかろうか。また常家の移った居館について、『千葉大系図』は「居上総国長柄郡一宮柳沢城」とあるが、『千学集』は前述の如く「一ノ宮大柳城」としている。この一宮は、上総国の一宮である、玉前神社の鎮座するところから由来したもので、一ノ宮荘または単に一ノ荘ともいわれた地域で、古くは埴生郡である。したがって『千葉大系図』『千学集』はいずれも近古に書き改められたものであることがわかる。一宮柳沢城については、高藤山であろうとの一説もある。この大柳の地名は、諸処にもあって、「青柳」などとおなじく「オホヤケ」のなまったもの、すなわち「公」「大家」で、公庁の子孫の相続する家柄から出たものであるといわれる。上総介忠常の居住したと伝える、下総香取郡神代村大友の旧跡を「政所台」といっている。「大柳」「政所台」いずれも統治に関係ある地名であることは興味深い。この大柳城と推考するところは、睦沢村大谷木区表台で、現在「シロハタ」（城端カ）「要害」（妙見祠ガアル）「馬場」などの地名を残している安養寺（真言宗）附近と推定される。しかし常兼は常家を何故この大柳に移館せしめたのであろうか、それについての理由は全く明らかでない。勿論上総介として、その統治上地理的事情は充分うなずけるのであるが、今日の地方官の異動の如き簡単なものではなかった筈である。この埴生郡は、東上総の中央部に位し、太平洋にそそぐ埴生川の流域を主体として、古くより開けた地域であって、ここには既に上代より、有力な豪族が蟠居していたと考えられるのである。その豪族は律令制の郡家を世襲し、古くからの伝統ある勢力のもとに、根強くこの地方を支配していたのである。したがって上総介としては、その政治力を行使する上に当然これらの豪族を利用することが必要であったに違いない。そしてこの地に古代より勢力を振るった豪族は、恐らく高橋氏であったのではないかと思われる。高橋氏については後述するが、前述忠常の居住した、下総の大友も古代より大伴部のおったところということが、当然予想されるのである。しかし上総氏がこの埴生郡に関係をもつに至ったのは、忠常の弟、将恒（中村太郎）が治安三年（一〇二三）その功労によってこの地に恩賞地が給与されて以来で、その後、常将の子恒直が埴生次郎と称して、この地におり、また常長の三子常房は郡内、千田にあって千田氏を称した。彼らはそれぞれ未開地を開拓して、その勢力の扶植につとめたが、彼らは天皇の裔孫貴種であるということから、地方民の尊敬をうけ、またそこに在地豪族との結合や、地方民との主従関係も容易となったものと想像される。したがって、常家が大柳城に移ることろは既にこの埴生郡の古代豪族との間に、その融合が血族的にも相当進んでいたことが考えられるのである。

常家には嗣子がなかったが、祖父常長の五子である常時（常晴）が上総氏の継嗣となった。

常時は相馬五郎と称し、祖先良文以来の伝領である下総相馬郡の地を、父常長より与えられていた。大治元年（一一二六）六月常時が上総氏を継ぐにあたり、子息常澄（常隆）の反対にもかかわらず、広大な相馬の伝領を猶子であった常重に譲ったのである。しかし、常重は自らの力でこの所領を守ることができない結果、大治年間、相馬六十六郷の地を伊勢大神宮に寄進して御厨の地とし、自ら下司としてこれを知行していた。相馬六郎を称した常澄はこれを不服とし、源義朝に訴えてその領地の返還をせまり、久安元年（一一四五）常重より相馬の地を責め取ったが、神威を恐れて、永久、御厨となすべく、天養二年（一一四五）避文を進じた。この事実は『櫟木文書』によって知ることができる。しかし常澄は、かねてこれを喜ばず、保延二年（一一三六）相馬郡を掠領し、ここに千葉常重と所領について互いに争ったのである。上総権介常澄の九子常清が相馬九郎と称したのは、この相馬郡の一部が上総氏の領有となった結果を物語るものと思われるのである。

常澄には多くの庶子があった。父の職を継ぎ上総権介となった広常をはじめとし、伊北新介常景、印東次郎常茂、潤野四郎盛常、大椎五郎維常、天羽庄司直胤、臼井十郎親常、金田小大夫頼次があり、おのおの上総国をはじめ、祖先の伝領地を支配し、また、未開地を開発して一族団結し、やがて東国最有力の上総氏を構成していったのである。

上総権介広常

常澄の子広常は介の八郎と称した。八郎という呼び名から考察すると、恐らく長子ではなく八男であったと思われる。保元、平治の両乱には祖先以来の縁故によって、源義朝に属して京師に戦い、剛勇を以って聞こえた。保元の乱に広常は、千葉介常胤をはじめ、安房の安西景益や神余某、沼平太、丸ノ太郎等と行をともにした。ついで平治の乱にも房総の武門は義朝に従って出陣したと思われ、『平治物語』に「上総介八郎弘常、待賢門義平ニ従フ、勢田ニテ義朝ニ別ル」と、弘常（広常）の名が見えている。広常はこの時、悪源太義平に属して、平重盛と大庭に戦った十七騎勇士の一人である。この戦は源家の大敗に終って、広常は本拠の上総一宮に帰り、しばらく天下の形勢を観望するのやむなきに至った。

この平治合戦における源家義朝の敗亡は、諸国の源氏勢力の凋洛となり、東国の武士団も、祖先以来の所領保全のため、盛運にのった伊勢平氏清盛に心を寄せるものが多くなった。『源平盛衰記』に、

「日本秋津島は僅か六十六ケ国平家知行の国三十余ケ国、既に半円に及べり、其上荘園五百余ケ所、田畠はいくらと云ふ数を不知」

とあり、権勢を得た平氏は諸国の貢税、神社仏閣、貴族の荘園を手中におさめ、家人を配置してこれを保持し、全国に強大な実力を扶植していった。東国の武士団が平氏の傘下に加わった状勢は、源頼朝の挙兵にあたっての関東武士団の動向に、よく窺知することができる。

この頃上総国には、平氏の郎党として、藤原忠清が上総介になって赴任していた。東上総もその支配下にあったが、それを物語るかの寺伝が、本地方の古刹として知られる、天台宗の妙楽寺・行元寺の二寺につたえられている。妙楽寺は長生郡睦沢村にあり、縁起に承安二年（一一七二）正月二十八日、小松内府重盛の沙汰によって寺院を再興し、仏具並に幾多の荘園を寄進されたとある。現存する同寺の本尊は丈六の大日如来坐像（重要文化財）であるが、その製作年代を平安末期とすることは、たまたま縁起にいう重盛云々と時代が一致して興味深い。この巨像の造顕は有力な豪族の力によるもので、恐らく上総氏、あるいはその一統の支持のもとに完成されたものであろう。また、行元寺は夷隅郡荻原にあって、円仁の創建に係り、安元元年（一一七五）平重盛が再興したと伝えている。さて、この平氏支配の東上総を源家の手に奪いかえしたのは、源頼朝であるが、これに協力して大功のあった上総氏・千葉氏のことは、別項本文に詳説されている。よってここには頼朝の房総における行動に若干触れておきたい。

治承四年（一一八〇）八月二十九日、頼朝は先着の北条、三浦一党の人々に迎えられ、安房国平群郡猟島（現在勝山町竜島という）に上陸した。安房国には源家重代の家人、安西・丸・神余等の諸氏がおり、頼朝は幼少より昵近である安西景益に書を遣し、九月三日上総国に広常を訪ねることとした。三浦義澄はこの地方の地理に明るい故を以て案内役をつとめ、猟島を出発、池月（江月）・大崩（佐久間村大山）の山道から蓑岡（嶺岡）の頂きを経て貝渚（鴨川町貝渚）に出た。この時、長狭六郎常伴（広常の兄弟、伊北新介常景の妻の肉親）は頼朝を要撃せんとしたが、三浦義澄は早くも偵知し、途中貝渚の余瀬にこれを迎え撃った。翌朝安西景益は頼朝の旅亭に参着、上総介広常の輩下にはなほ、平氏に通ずるものがあり、長狭の如きものは巷に満ちている。したがって広常の館宅に赴くにはまず使者を遣して後に然るべきことを進言した。この時、北条時政は潜かに上総に入らんとの意見を述べたが、和田義盛は「潜行するも忽ち覚らん、先ず行きて広常を説伏させ申さん」と申出た。この和田義盛は三浦大介義明の嫡子杉本太郎義宗のの長子で、父、義宗は三浦とは一衣帯水の安房に勢力をのばし、安房国杉本にいた。また、広常の舎弟、金田小大夫頼次は外叔父で、上総氏との関係も深かった。かくて義盛は四日、長狭の旅亭を出発、上総埴生郡一宮の広常の許に赴いたのである。広常の居城に就いては、これまで夷隅郡布施村の殿台があてられてい

る。この布施村殿台説は宝暦年中、中村国香によって著述された『房総志料』が初見であり、従来多くの史学者はこれを用いている。また一宮高藤山がその居城との説もある。『房総志料』は「和田義盛をして広常が許に使す、往来二日程して其報あり、按に東条の地より上総地方往来馬行二日程にして至るところ、広常が館というべき処、布施村ならではなし」と記している。しかし馬行往復二日、上総一宮をもって遠しとする見方はあたらない。むしろ一宮玉前神社と密接な結びつきのある広常の居館は、一宮大柳館であるとなす見方の方が妥当であろう。

このとき、広常の態度には、まことに不得要領なものがあった、このことは別項本文に詳説されているが、頼朝の安房上陸の第一計画は、実に広常を恃むことにあったのである。事実この広常の去就こそは、頼朝の東国挙兵の成否を左右するものであった。

その後広常は千葉常胤の一族の頼朝に加勢の報を聞き、上総全域に分布する一族郎党を召集して、その数二万余騎という大軍を引きつれ、九月十九日武蔵と下総の境である隅田河辺の頼朝陣営に到着、その麾下に投じたのである。そしてそれより十三日を経過した十月二日、広常は、常胤と共に先導して、太日（利根川口の名、今の江戸川）・隅田の両河に浮舟を集めて、舟橋とし軍兵を渡した。この時上総勢は、周東（君津郡秋元郷）・周西（君津郡周西郷）・伊南（夷隅郡東部海岸寄りの地）・伊北（夷隅郡伊南地区の西部）・庁南（長生郡長南附近上総国府ノ南ノ境）・庁北（辺庁北ノ地ハ山辺郡土気辺ヲ云フ『大日本風土記』）の一族家人、郎党は、千葉勢と協力してこの渡橋を成功せしめたのである。

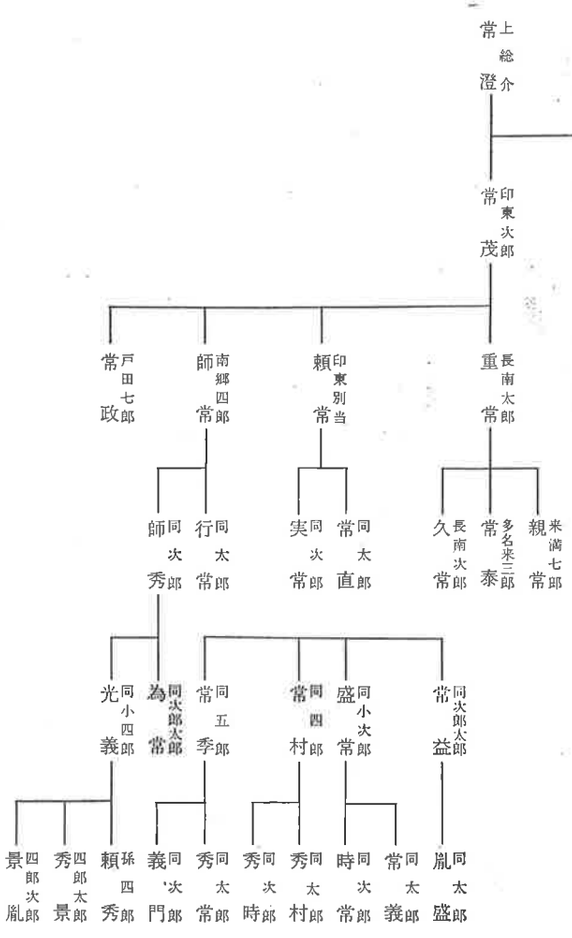
広常の直弟、相馬九郎常清がその功労によって、やがて隅田周辺の地を給与され、この地名を冒称した。（隅田氏については後述する）

上総氏の分布

上総氏の一族分布に就いては資料に乏しく、千葉諸系図の外は、僅かな断片的資料があるにすぎない。その千葉諸系図は、上総氏を中心としてできたものでないため、非常に異同がはげしく、いずれが正しいか判断に苦しむのである。いま参考に、千葉系図（群書類従本）の記載のままの順を追って、列挙してみよう。

上総権介常澄（千葉系図は常隆）の子、常景は伊北新介といった。伊北は夷隅郡の北部で、以北の如く考えられるが、実は夷隅郡の西部地区を称したもののようである。『千葉大系図』には、常隆の兄弟となっており、伊西新介としている。常景の子、常仲は伊北庄司とある、この常仲は治承四年（一一八〇）九月上総国府で上総氏としては最初に頼朝に謁したのであるが、隅田陣

（神代本千葉系図ニヨル）



に参加していなかったため、頼朝に謀叛の輩と見做されて、千葉常胤の子息胤正らの追討をうけている。すなわち常仲は同年十月三日伊北の居館で自殺し、その一族も自害または蟄居している。常仲の母は、かって頼朝を安房で殺害しようとした長狭郡田原城主、長狭六郎常伴の身内であった。しかし、常仲の孫小太郎は祖父自尽ののち、許されて旧領を安堵されている。

常澄の次子、常茂は印東次郎と称した。印東は下総国印旛郡の東部を指し、常茂はその地方を所領していた。『千葉大系図』に常茂の子、常吉は周東太郎と称し、次子常泰は周西次郎、後に助忠と号すとある。周東は周准郡の東、周西はその西、君津郡周西村あたりであろう。『神代本千葉系図』によると常茂の子、重常長南太郎とみえる。この長南は現在の長南町である。長南太郎重常の子久常を長南次郎といい、常泰を多名来三郎といったが、多名来は現在の長南町棚毛の地である。次

の親常は、来満七郎を称しているが、来満は蔵持で長南町蔵持の地、和名抄の車持郷の故地である。

また常茂の四子師常は南郷四郎と称した。南郷は埴生郡の南郷で、野見金山の東南にあたり、いまの長南町水沼の隣りである。次の常政を戸田七郎という。戸田は現在、市原郡南総町戸田の地で、それぞれ冒称の地に居住していたことが推考される。

『千葉大系図』は常成（常明の子としている）を長南四郎、その子の重常を長南太郎とし、次の常家を長南次郎、次の常範を大内三郎といっている。大内は木内の誤字である。千葉系図には木内三郎とあり、神代本系図は、常範を木内太郎、但し小見九郎としている。木内は木内荘で、下総香取郡小見川で和名抄の麻続郷にあたる。次を潤野四郎盛常という。（千葉系図同じ）潤野は和名抄の湿洋郷で、市原郡潤井戸の地である。末の維常は大椎五郎と称した。大椎は現在の山武郡土気町大椎の地、祖先、上総介忠常以来居住したところで、維常は椎木・綱田の祖となった。椎木・綱田は一宮町東浪見の地で、椎木、綱田・中原・泉の旧四ヶ村は一宮玉前神社の十二社の内になっている。

天羽庄司直胤

直胤は『神代本千葉系図』には秀常、天羽庄司十郎とあり、上総国天羽郡天羽庄司の庄であった。君津郡天羽町不斗区に障子根があるが、恐らく天羽庄司の旧地であろう。近くの相川の山中に「アモウジロ」（天羽城）と称する処、木戸（キド）相（アイ）、君田、皿引、一本松などの地名がある。これは天羽氏の要害に関連ある地名であろう。『義経記』に

「上総国ノ住人、イホウ（伊北）イナン（伊南）チャウホ（長北）チャウナン（長南）ウサ山ノベ（武射、山辺）アイカク（相川カ）ハノカミ（海上カ）ノ勢都合一千余騎スヘカハ（周准川）トイフ所ニハセ来ツテ源氏ニ加ハル」

とある。この「アイカク」は天羽城のある相川のことで、天羽庄司直胤および、その郎党を指しているものと思われる。

広常の歿後、無実の罪はれて、その一族は本領居地、元の如く安堵となったため、直胤の子直常は天羽次郎を称して、建久元年十一月の頼朝上洛にしたがい、そののちもしばしば随兵の中にえらばれている。

臼井十郎親常

臼井十郎親常については詳かでない。臼井は下総印旛郡臼井で、『吾妻鏡』の文治元年十月二十四日の随兵中に、臼井六郎が見える、臼井六郎は臼井常康であろう。親常は常康の猶子であったか、明かでない。

金田小大夫頼次

頼次は上総国埴生郡金田におり、金田小大夫と称した。妻は三浦大介の女、治承四年（一一八〇）八月、頼朝の挙兵に当り、上総氏として最初に参加した人である。『吾妻鏡』八月二十四日の条に「上総権介広常の弟金田小大夫頼次、七十余騎を率いて義澄に加はる」と見える。

同二十六日に、頼次は衣笠城に兵騎を率いて加わり、東木戸に三浦義澄、義遠、西ノ木戸は和田義盛と金田小大夫頼次、中陣は長江義景、大田和義久が守り、寄手軍の畠山重忠、河越重頼を迎えて戦った。これは頼次が相模におったので、縁家の三浦氏に属して戦ったが、兄広常の命によったものではなかった。寿永二年（一一八三）十二月、広常の誅死後、金田に蟄居中病をもって歿している。その後広常の無実が明らかとなり、翌くる三年三月、嫡子康常に本領が安堵され、埴生郡勝見に居館した。現在の睦沢村寺崎区字城ノ内はその旧跡といわれている。康常の嫡子兵部少輔盛常（「千葉伝考記」ハ成常ニ作ル）は宝治合戦に上総権介秀胤に属し、大柳館没落の後、千葉介頼胤のもとに蟄居した。その後この勝見は、宝治合戦の功労の賞として、前上総介足利義兼の三男、左馬頭足利正義（義氏の前名）に与えられ、以来その子孫が居館した。

盛常の子胤泰は叔父鏑木胤定の養子となり鏑木八郎を称し、胤泰より数代を経て、再び上総にかえり、金田刑部と称し、長柄郡岩井村にも居たという。

相馬九郎常清

常清は相馬九郎と称し、上総権介常澄の子、九郎の輩号からみて、広常の直弟であったと思われる。相馬は下総国相馬郡で、この地は祖先良文以来の伝領であり、祖父相馬五郎常時がその父常長より譲られたところであるが、常時はこれを猶子の千葉常重に譲った。父常澄はこれを喜ばず、この所領について、千葉氏と争ったが、その後相馬郡の一部が上総氏の領有となって、常清がこれを所領したものであろうことは前述した。また常清は角田の祖であり、その子孫が角田氏を称したことは千葉系図によって知ることができる。この角田は隅田にも作る、邨岡良弼はその著『房総游乗』に「須田作ニ角田（千葉系図）或墨田」（東鏡、日蓮年譜）従隷埴生郡」とある。しかしこの隅田の称号は、武蔵国隅田の地名を冒称したものである。すなわち、常清が治承四年（一一八〇）九月源頼朝の挙兵に参加し、兄広常にしたがい上総氏一族とともに、太日、隅田の両河の渡橋に功労のあったことは前述したが、その恩賞としてこの武蔵隅田河の周辺が給与されたのである。これについて、隅田氏の開基である日蓮宗の古刹、新曾の妙顕寺（埼玉県北足立郡戸田町新曾）縁起によると「隅田氏雖不詳先祖当国、新倉、豊島、足立、葛飾亘於四郡内三万五千貫文之地給、代々新倉」云々とあって隅田氏の領有が推知できるのである。

また隅田氏が、高橋氏を称したことは、日蓮宗に古来伝えられているところである。しかしこれについて解明すべき資料は、現在のところ見出せないのが遺憾である。この隅田、高橋が一家であることは、日蓮宗門の古伝説をとり入れ、独自の宗史記述を行なっている伊豆玉沢妙法華寺の学僧日通（一七〇二―一七二八）の著『祖書証義論』に指摘されている。

そこで高橋氏とは如何なる氏族であるか、また高橋氏と上総との関係について、いささか私見をのべてみよう。

東上総の古代氏族、高橋氏

高橋氏について『姓氏家系大辞典』は「高橋氏、阿部氏の族、磐鹿六雁より出ず、景行紀、五十三年の条、冬十月上総国に至り、海路より淡の水門を渡り給う、高橋、安倍氏の族膳臣の後也」とある。そこで煩をいとわず『景行紀』を抄記してみると「冬十月、上総国に至りて海路より淡水門に渡りたまふ。是の時に賞賀鳥の声聞ゆ、其の鳥の形を見そなはさむと欲ひて、尋ねて海中に出でます。仍りて白蛤を得たり。是に於いて膳臣の遠祖、名は磐鹿六雁、蒲を以て手繦に為て白蛤を膾に為りて進る。故れ六雁臣の功を美めて膳大伴部を賜ふ」とあり、景行天皇の房総巡幸にお供した磐鹿六雁命が大膳の事について、功をたて膳臣大伴部を賜わったのである。また『姓氏録』によると「高橋朝臣。阿部朝臣同祖。（天武）天皇十三年改二膳臣一。賜二高橋朝臣一」とあって、天武天皇十三年に膳臣を改めて高橋朝臣を賜わったことがわかる。そしてこの高橋氏は代々朝廷の大膳を掌った名門であったが、同じく大膳に奉仕する慣例をもっていた安曇氏と対立するに至り、互に争ったのである。ここにおいて高橋氏は祖先の大膳に奉仕した歴史的由来を述べ、自家の立場を主張するため、延暦八年（七八九）同氏が上申したと伝える『高橋氏文』に「子孫等をば、長き世の、膳職の長とも、上ツ総の国の長とも、淡（安房）の国の長とも定めて、余の氏は任け賜はで、治め賜はん、若し膳の臣等の継嗣あらざらんには、朕が王子等をして、他の氏の人等を相交へては乱らしめじ」と述べている。すなわち高橋氏は「上総の長」であったことはこれで知られる。しかしその本拠地については、いずれであったか確証はない。しかし上総埴生郡にある能満寺古墳が、房総において最古に属するものといわれ、またその周辺に散在する古墳群から考察するとき、上総、否、東上総の古代文化は、恐らくこの埴生郡を中心として発展したものと想像する。そして私は『国造本紀』には見えないが、埴生国造か、あるいはそれに準ずべき豪族の本拠であったであろうことを推考するのである。『国造本紀』に阿波（安房）国造大伴直大滝は天穂日命の裔としている、しかし大伴直は大伴部であろうから、高橋氏と同じで、磐鹿六雁命の裔とすべきである。もし埴生国造が『国造本紀』の誤脱であって、それが高橋氏であったとすれば、高橋氏文のいう「上総の長とも、淡国の長とも」とあるそれが真実として成立するのであって、上総埴生郡の豪族は、恐らく高橋氏であったろうと推定されてくるのである。

高橋氏は大膳に奉仕したその職掌から、若狭国造をはじめ、諸国に同族を分布し、それぞれ荘園を保有していた。またその関係のあったと思われる地名が諸所に残されている。一宮町の高藤山の附近に「カシワ」の地名があり、また茂原市高師は『和名抄』の「埴石郷」に擬せられているが、『地理志料』は「埴石は高石の誤りで、高師ならん」といっている。しかし私考では、「高師」は「タカハシ」の転訛と思われる。

また、子安神として知られた旧豊田村「腰当」は「カシワデ」の訛った地名ではあるまいか。下総香取郡中村「借当」は明かに「カシワデ」の転訛であると聞いている。前述したが香取郡神代村「大友」は、現在も古墳の散在が二三見られるところからも、恐らく膳臣大伴部の旧地であったと思われるのである。

また豪族の祭祀として、上総第一の古社である玉前神社が考えられる。神社の縁起によると、日本武尊に随従した大伴掃部連が、この地の国造となり、この社を祀つたという。大伴連は膳臣高橋氏と同じであることを、しばしば述べたが、これによると高橋氏が祀った社であることになる。祭神の玉埼神では古く東海にその奇瑞を現じた自然神であったことが、古伝説として伝えられている。古代埴生郡を統治した高橋氏が、自ら治める国神としてこれを尊崇し、この神祇をもって自らの権威を基礎づけていたものかと思われる。

高橋氏と上総氏との関係

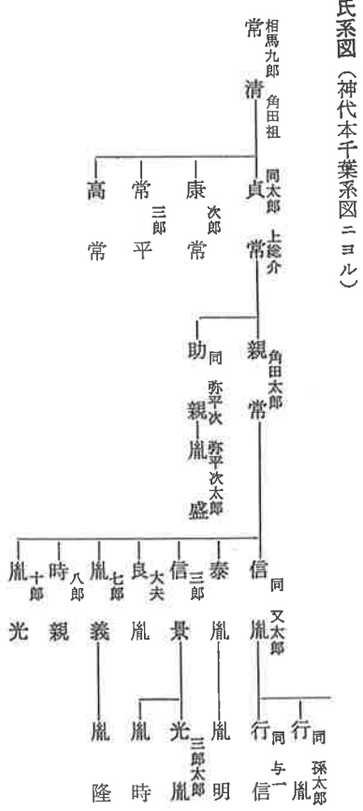
古代より繁栄をつづけていた高橋氏は、律令国家のもとに、郡司等を世襲してその勢力を保有していたのではないかと思われるが、この律令国家が次第に弛緩してゆくにつれ、それとは逆に上総国に在庁して支配権力をもった桓武平氏が、王臣貴種として、地方民の間に信望を拡大していったことが考えられる。そして、これが在地豪族と婚を通じ、あるいは緊密な主従関係をむすんで、開発領主となり、また有力な武門となっていったのである。

上総氏の一族である隅田氏が、高橋氏を襲称するようになったのもかかる関係からと考えるのである。これらは、あえて上総氏にかぎられたことではなく、各地に勃興した当時の武門にみられるところである。その一例として健田氏を襲称した清和源氏の武田氏、また秀郷流藤原氏を冒称した、同じく清和源氏の足利氏がそれである。

この高橋氏が武門として『吾妻鏡』にみえるのは、建久元年（一一九〇）十一月十七日の条である。これは頼朝の開幕以来、初めての上洛であったが、この随兵中に「卅五番、高橋太郎、印東四郎、須田小大夫がみえる。これらには、実名が示

されていないので、残念ながら系譜の上に参照できないが、年代的に考察して、恐らく常清の子息か孫くらいに当るものと思われる。

隅田氏系図（神代本千葉系図ニヨル）



隅田氏の盛衰

隅田氏の祖、常清は上総の郡郷、下総相馬、武蔵隅田、駿河賀島等を所領し、その一門は非常に繁衍した。しかるに寿永二年十二月、上総氏の総領である広常が、鎌倉の柳営において、梶原景時のために謀殺され、上総一族は斜陽のみちをたどらなければならなかった。のち間もなく広常の無実が判明して、一族は旧領を安堵されたが、総領広常を失った上総氏は、一族支配の総領として常清が、それをうけついたものと思われる。これについては、千葉諸系図に見られる常清の子、貞常が上総介に任じられていることからもそれを知ることができる。広常歿後の上総介の職は、頼朝によって、足利義兼が任じられたが、如何なる事情であったか、文治五年（一一八九）十二月、義兼はこの職を辞退したので、朝廷は建久元年（一一一九）正月、平親長を新に上総国司に任じている。貞常は恐らく新国司親長の在庁として任じられたものであろう。その後の上総介の職は、千葉常胤の孫に当る、堺平次常秀が一宮大柳館に移り、これに任じられている。このころにおける隅田、高橋氏一門の勢力の推移、動向については、資料に乏しく全く明確を欠くのであるが、多少の盛衰はあったにせよ、幕府創業以来の家人として、その社会的、経済的な面において、有力な土豪として存在していたことは想像できる。しかし、かっては勢威をきわめた上総氏であったが、広常滅亡の後は、その遺領を給与された千葉氏の下風に立つに至った。常秀の子秀胤は父の職を継いで、上総権介となり、また幕府の要職、評定衆を兼ねるなどその栄進ぶりを示していたが、宝治元年六月

三浦泰村の乱に関係したため、大須賀胤氏、東中務入道素暹を将とする幕府軍の攻撃をうけたのである。この戦の状況については『吾妻鏡』が、詳細にこれを述べている。この大柳館に程近い、永井・久原（何れも長南町）に古来、大火伝説がつたえられている。

ここは、埴生郡の丘陵が東にのびて、大谷木区の「要害」（大柳城の一部）につづき、その南面に耕地が開け、埴生川の流れがこれをかこんでいる。このあたりは、内埴生と称したところであって、その谷谷は自然の防禦的要害を形成している。ここに隅田氏は本拠をおいていたものと考える。しかも須田氏を名のる旧家群が、現在につづいているのである。たまたまこの部落に残る古来の伝承が、『吾妻鏡』に見える当時の戦況と相合致するように思われるので、『吾妻鏡』を抄記してみる。

「其後数十宇舎屋同時放火、内外猛火混而為逆二半天一。胤氏郎従等、咽二其熾勢一還遁二避于数十町之外一」

久原・永井の両部落の伝説は、十数戸が類焼したというのである。山を隔てた両部落が同じような伝説をもっているのも不思議であるが、これは「其後数十宇舎屋同時放火」とある如く、上総氏系統の人人がこの時秀胤にしたがって、防戦につとめた後、おのおのの館に火を放ったものが、いつしか大火伝説のみとなって伝えられたものと思うのである。

宝治合戦の後、秀胤に属した上総氏の一門の多くは、一応、千葉氏の惣領たる頼胤（当時九才）の許に蟄居というかたちとなった。事情は千葉系図等によって窺い知ることができる。その後建長元年（一二四九）二月京都閑院殿内裏炎上のことあり、朝廷は幕府に命じて、これを造築せしめることとなり、幕府は諸国守護、地頭に賦課して、建長二年三月一日、造閑院殿雑掌の事を定め、これを朝廷に奉じたのであるが、その交名中に、角田、高橋氏の名が見えている。

築地　八十八本　桓形　十八本
二本　右衛門陣北　角田入道
自押小路南自油小路西十一本　高橋刑部入道
二本
自二条北　自寛　西洞院面東廿本
一本　高橋十郎跡

この閑院殿は、建長三年六月二十三日に落成しているが、これに見える角田、高橋の人人は上洛してその造営に当ったわけである。

隅田氏と日蓮上人

建長四年四月二十八日、房州清澄において日蓮は法華宗を開いたのであるが、寺中内外衆の驚愕するところとなり、ことに地頭東条景信の憤激その極に達し、遂に清澄を追い出されたのである。しかるに、無上道のためには、敢て身命を惜まずと、日蓮はいよいよ鎌倉における伝道を志したのである。それに先だって、間道を上総に向い、埴生郡の笠森寺に参籠したと伝えられている。この日蓮の笠森参籠については、「元亀二年辛未春三月　笠森寺阿闍梨坊権大僧都行讃」の奥書ある『日蓮上人笠森寺参籠由来』一巻が、文献としては最古のようである。これは史伝ではなく所謂、縁起書であって夢告霊感説をとり、いささか粉飾が見られるが、この伝説の中から何らかの史実をつかんで見たい。まず日蓮は何故に遠路をこの笠森寺に参籠したのであろうか、そこには何らかの理由がなくてはならないと考える。

それは日蓮が法華弘通に当って、その基盤となるべき有力な外護層の把握を急務としたからであった。これは布教の常道であって、日蓮自らも「正法をひろむる事は必ず智人によるべし、設い正法を持てる智者ありとも檀那なくんば争か弘まるべき」と述べている。さきに日蓮が修業した清澄寺は当時安房上総の総氏寺的存在であった。したがって、上総の豪族として隅田、高橋氏は勿論この寺には多少の関係をもっていたであろうことが考えられる。また日蓮の参籠した笠森寺は板東三十一番の観音の霊場であり、清澄寺と同宗の山門派に属する慈覚流の名刹であった。それにこの笠森寺は、また隅田、高橋一族の祖先以来尊崇した私寺的存在でもあったのである。かかる関係から日蓮は先ず上総の隅田、高橋氏を教化し、これを外護者に迎えるのが、上総訪問の目的であったと思われる。そしてこの笠森寺において隅田一門中の五郎時光が、逸早く日蓮の教化に服し、上総における日蓮初唱初檀の人となったのである。これについて、もちろん時光と日蓮との間には、それ以前において既に親交があったようにも思われるのである。

その傍証として、私は『葉黄記』の記載を挙げておきたい。この『葉黄記』は『葉禅記』とも称し、葉室中納言定嗣卿の日記であって、寛元四年（一二四六）より宝治二年（一二四八）まで記されているが、宝治元年（一二四七）五月九日の条に、京都東山、新日吉社の小五月会の通例行事中に、東国武士による流鏑馬が行われたことが見える。その交名中に、時光の名が記されている。

「六番　射手　子息　四郎　平政景
　　的立　高橋新左衛門尉大宅時光」

とある。この新日吉社は後白河法皇が叡山東坂本の日吉大社を京都東山に勧請したもので、朝廷の大切な行事である小五月会をこの社前で行なった。この祭には上皇、法皇も臨幸し、多くの殿上人が奉仕するきわめて盛大な行事であったといわれる。宝治元年、時光は新に左衛門尉に任ぜられ、大番役として上洛しており、若年ではあったが、この小五月会の流鏑馬に的立の役をつとめたのである。この頃、日蓮は叡山に遊学中であったので、恐らく時光と日蓮はある機会に知遇を得て親交を結ばれ、そこにある種の黙契があったことが想像される。それがやがて日蓮の開宗直後の上総訪問となり、そして時光が一族中第一に、日蓮に帰依するようになったと考えられるのである。かくの如き推考が許されるならば、日蓮の上総訪問は決して偶然のものではなくなり、伝説の意義が成立する。その後隅田、高橋の一門の多くが日蓮に帰依し、藻原の斎藤兼綱とともに、上総における初期日蓮教団の推進力となったのである。時光は、埴生郡須田に居館していたが、武蔵新倉にも下屋敷を構え、これを往復しており、正中二年（一三二五）十二月十二日に歿したと妙顕寺過去帳に見える。また永仁以来、応仁元年に至るまで、上は天皇、上皇より、下は公卿将軍以下武士僧侶等の崩御、歿年をかきついだ『常楽記』（群書類従本）には、

嘉暦三年戊辰三月二十一日　高橋五郎時光他界
暦応四年辛巳正月十二日　高橋弥四郎入道元光死去

とあって、その歿年が違っている。しかし同書中に「南条左衛門入道死去」が「正中二乙丑十二月廿二日」とあって、これが妙顕寺過去帳の時光の歿年に合致するのである。これは『常楽記』の筆写中、あるいは時光と南条入道の歿年を書き違えたものではないだろうか。

また隅田一門中、日蓮に帰依した隅田次郎時忠がある。時忠は同じく須田に居館したが、その子息二人は日蓮の直門に入り、兄を丹波公日秀と称し、弟を山城公日進と号した。日秀は日蓮中老の一人、日蓮入寂の後、六老日向の後を襲って藻原妙光寺（藻原寺）の三世となり、日進は同じく日向を師とし、その後をうけて身延山久遠寺三世を継いたのである。また、五郎時光の子息徳麿（板橋区徳丸は徳麿所領地）は日向の室に入り日堅と号し、武蔵新倉の妙典、妙顕、妙蓮三寺の三世を継いた。またその一門であった、駿河国富士郡賀島には、高橋六郎兵衛入道がおり、早くより日蓮と知る間柄であったが、いろいろの関係から日蓮への入信はその歿年の間近であったといわれ、その妻室は日蓮六老の一人、富士大石寺の開山日興の叔母にあたる。駿河の高橋一門にも多くの日蓮帰依者がおって、駿河の日蓮教団を形成していたのである。

隅田氏の衰退と民間没入

文永、弘安二度にわたった蒙古の来襲に際し、幕府の御家人として隅田、高橋氏は、北九州の防備に赴いたと思われるが、その資料はみられない。この両役によって日本のうけた財政の疲弊は甚大なものであった。そのため社会は動揺を激しくし、その秩序は乱れ、執権北条氏の威令も行われなくなった。この時後醍醐天皇は武家政治を廃し、天皇親政を決意されたが、諸国にあって幕府に不平不満をもった有力武士は天皇の味方となり、北条氏にそむいたのである。隅田氏の出身であった藻原妙光寺三世日秀の入寂した建武元年（一三三四）の、その前年のことである。元弘三年（一三三三）五月七日、六波羅陥落の後、探題仲時、時政は、後伏見、花園の二上皇と光厳院を奉じて洛外に出て、関東の援兵を合して、再挙をはからんとしたが、六波羅南の北条時益は、四条河原附近に戦死、仲時は残兵をあつめて、辛うじて近江国の番場峠（坂田郡米原市番場）の宿に落ちのびたのである。しかるに九日、後醍醐天皇の密旨を奉じた守良親王は、近傍の美濃、伊賀、伊勢の武士を集めて、近江の番場峠に激撃した。六波羅方は、かねて信頼をかけていた美濃の土岐、参河の吉良氏が官軍に応じたことを知り、敵せざるを覚って東海道脱走を断念し、番場峠米山の麓、一向堂の前において合戦、遂に仲時以下四百三十余人が討死、若しくは自刃して、玆に六波羅滅亡の最後を飾ったのである。この戦に隅田、高橋の一族は京都遠征軍に参加し、六波羅の最後に殉じて悲壮な討死をとげ、今は空しく、近江番場の蓮華寺（浄土宗）の過去帳（重要文化財）にその名をとどめている。今その過去帳によって、節に殉じ相はてた隅田、高橋の人人の名を挙げてみよう。

高橋参河守時英　四十一才
同　孫四郎業時　三十四才
同　又四郎範時　十九才
同　五郎盛時　二十一才
同　孫四郎左衛門尉元時　十七才
隅田左衛門尉時親　三十九才
隅田孫五郎清親　二十八才
同　藤内左衛門尉八村　四十二才
同　与一真親　十九才

同　四郎光親　二十六才
同　五郎重親　二十才
同　親左衛門尉信近　二十才
同　孫七国村　二十二才
同　又五郎能近　十六才
同　藤三郎国近　十七才
同　三郎祐近　二十五才

ここにみる高橋、隅田の人人が悉く上総勢であったすることは、なお断定のかぎりではないが、しかし東上総の人人が少からず含まれていることは、事実とみなしてよいと思う。

隅田・高橋氏もその祖常清が鎌倉幕府の創業につくして以来、幕府内において重きをなし、有力な家人として繁栄をつづけていたのであるが、北条氏の滅亡とともに、その運命を共にし、南北朝以後、やがて下剋上の社会風潮に処して、従来の権門としての力を失い、新しく台頭した勢力に圧倒され、衰退の一路をたどったようである。一部には房総に新しく勢力を得た、里見氏の家人となって活躍したものも軍記に見られるのであるが、多くは民間に没入して、かっての古代豪族としての権勢は次第に世上から忘却されていったのである。諸国に散在する角田（多く「かくた」といわれている）（隅田、須田、墨田）を称する氏族は、みなその一門であるが、この隅田氏のあるところ何処でも、また高橋氏のあることに注意されなければならない。

なお、今後の研究にまつところが大である。